

核燃施設めぐる思い

六ヶ所村 ラプソディ 名古屋で20日上映

青森県六ヶ所村の使用済み核燃料再処理施設をめぐる住民の思いを描いたドキュメンタリー映画「六ヶ所村ラプソディ」(鎌仲ひとみ監督)が二十日、名古屋市中区の市女性会館ホールで上映される。鎌仲監督は十五日、市内で会見し「作品を先入観なく見て、今後のエネルギー利用について多くの人に考えてもらいたい」と述べた。

鎌仲監督は、劣化ウラン弾で被爆したイラクの子どもたちを取り上げた「ヒバクシャ―世界の終わりに」を二〇〇三年に制作。劣化ウラン弾の原料が日本からも出ていると知ったことをきっかけに同村で制作を始め、〇四年三月から〇六年三月に施設が最終試験運転に入る直前までの二年間を追った。



映画では、再処理施設について賛成派と反対派双方の住民の声を伝える。

「六ヶ所村ラプソディ」の名古屋上映会に先駆け会見する鎌仲ひとみ監督。名古屋市中区のYWCAで

る。鎌仲監督は「この作品に結論はない。両方の意見を、どう考えるかは観客に任せたい」と話す。施設建設で地元の活性化が見込まれ、大半が賛

成派となっている同村。何も言わずに中立を保っていた住民が「黙っていることは賛成している」と同じだ」と気付き、勇気を出して発言する様子を紹介するなど「核が身近にある生活」に葛藤(かっとう)する住民らを客観的な視点で描いている。

上映会は同日午前十時、午後二時、午後六時の三回。午後の二回では、上映前の三十分間で鎌仲監督が作品について話をする。入場料は一般千二百円、六十五歳以上・学生・身障者は千円。問い合わせは「なごや『六ヶ所村ラプソディ』を観る会」の岩田和憲さんへ。電052(751)1521へ。

(小野沢健太)